

ほうさ 第36号

1989年1月

名古屋市蓬左文庫
Nagoyashi Hōsabunko

展 示 風 よ り

1.7(土)~3.12(日)

蓬左文庫の古文書

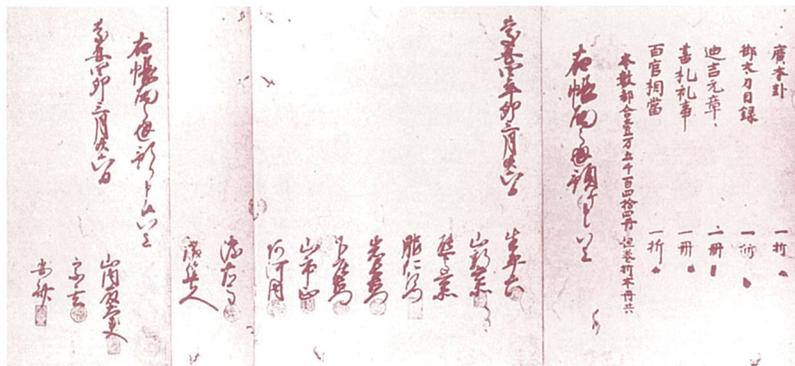
「蓬左文庫は、古文書のたくさんあるところですね」と言われることがよくある。古文書という言葉は、古い書きものつまり古い文献全体をさす意味に使用されることもあるので必ずしも誤りとはいえない。しかし、本来の意味からすると、尾張藩の書物倉であった御文庫の蔵書を受けついだ当文庫としては、古い書物は、たくさんあると言っても、古文書については、あまり数多く所蔵しているとはいえないのである。

一口に文献といっても(1)著作、編纂物、(2)記録(日記、覚書)、(3)文書の三種類があり、前二者が作成者の一方的意志表示の産物であるのに対して、文書は作成者が特定の者に対して、その意志を表明するために作成されるもので、必ず差出人と受取人が存在する。ただし、実際には、古代、中世の記録が、写本で伝えられ、著作や編纂物同様、典籍＝書物としての扱いを受け一方、近世、近代の日記や覚書等は、文書とともに伝わるが多く、一括して家ごとに何々家文書として扱われることがほとんどである。

このように、本来の性格からすると古文書が御文庫の蔵書として伝えられるのは希なことといわねばなるまい。しかし、実際には、様々な形で、古文書も御文庫に伝わっているのである。

ひとつは、文庫の管理上の文書としてであり、その代表が、蔵書目録である。目録だけを見ると、蔵書の記録ということになるが、書物受け取りの目録であれば、旧蔵者宛の文書であり、蔵書調査の結果であれば、管理者宛の文書である。ちなみに、初代藩主義直が、父家康の遺品として譲り受けた駿河御筆本の目録は、義直の家臣による受領証文であり、義直の死の翌年、慶安4年(1661)の義直の蔵書目録は、藩の重臣から書物取扱い担当者への請け渡しの証文である。このほか、文庫の管理上、多くの文書が作成されたことが予想されるが、実務上の書類は、蔵書とは別に保管されていたから、目録以外で現在まで伝わっているものはほとんどない。ただし、偶然書物といっしょにされていたため残っているものもある。「大日本史」の編纂、水戸学の創始者として知られる水戸光圀が、二代藩主光友に宛てて、蔵書の借用を願った書状などもその一つといえよう(3ページ写真参照)。

いまひとつは、書物の中に文書が含まれている場合である。その代表は、中国古代の農書「齊民要術」や、平安期の宮廷役人、蔵人の職務についての書物「侍中群要」の裏に残る文書である。表は、どちらも13・14世紀、



義直蔵書預り目録(慶安目録)

鎌倉時代の写本だが、紙が貴重であった当時、不用となった書状や証文の裏を用いて書物を写したため、鎌倉幕府の執権北条氏宛の書状など、第一級の歴史史料が、紙背文書(裏文書)として残されたのである。

また、朝鮮古活字本の見返しに記された「宣旨の記」も文書といえる。15・16世紀の朝鮮では、李朝の後援のもとに優れた

金属活字印刷が発達、多くの優秀な出版物が刊行された日本には、近世初期を中心に流入し、当文庫には家康、義直の蔵書をはじめ約1000冊が伝わっている。朝鮮本には、王室から下賜された内賜本（宣旨本）が多く、第一冊の見返しに、下賜を伝える文言と役人の署名があり、巻頭右上部に「宣旨之記」の朱印が捺されている。

このほかに、文書そのものではないが、文書の写を集めて収録した書物もある。義直の蔵書の中には、歴史に対する興味ゆえか、支配者としての教養のためか、頼朝から信長まで、武家政権の覇者達が発給した文書を筆蹟から花押までそっくりに模写した「武家文書集」ともいふべき書物をはじめ、「文書集」がいくつか含まれている。

さて、明治維新とともに名古屋城を出た御文庫の蔵書は、尾張徳川家の邸内に保存されていたが、大正から昭和にかけての蓬左文庫の創設に際しては、御文庫の旧蔵書を中心に御日記所をはじめ旧藩の各役所が所蔵していた書物、記録の一部、尾張徳川家が維新史編纂のために収集した文書、記録、維新後、購入や寄贈によって収集した書物もあわせて、蓬左文庫の蔵書となった。これによって、古文書に類する資料も蔵書の一部を占めることとなり、以後、購入、寄贈、寄託などによって、つぎのような、家別の文書群も蔵書に加えられていったのである。

美濃高木家文書（東高木家文書） 江戸時代美濃国石津郡時、多良郷に住んで木曾三川の治水奉行を勤めた旗本交代寄合（旗本でありながら在地して、江戸に参勤するなど、大名並みの格式を有する家）高木三家（西・東・北）の内、東高木家の文書。西高木家文書については、約8万点が名古屋大学図書館に所蔵されており、治水に限らず、旗本の支配、家政を知る上での重要な史料群として知られる（『高木家文書目録』1～5参照）。当文庫蔵の東高木家文書は、領地支配から家政にいたるまで、多義にわたって約200点におよぶが、治水史料についてはほとんど欠落している。明治初年、当文庫同様黎明会に所属していた林政史研究所が、東京の某書店から購入、名古屋に移管とともに当文庫蔵となったが、一部は現在も徳川林政史研究所蔵。なお、東高木家文書の主力は現在岐阜県海津郡海津町内の個人蔵で整理中。

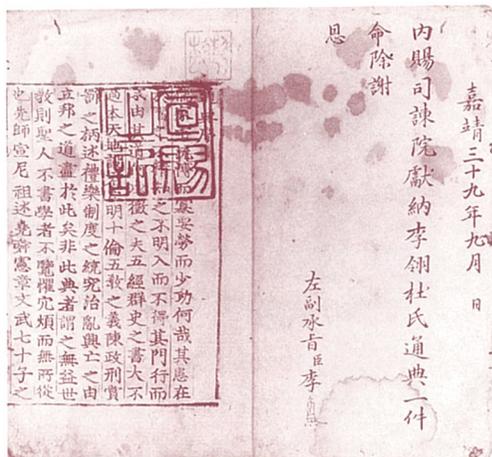
大炊御門家文書 江戸時代の公家文書。大炊御門家は、平安後期の関白、藤原師実の第三子経実を祖とし、清華家（五摂家について大臣・大将となり得る家柄）に属する。代々有職故実を家職としたため、故実書の写本が中心であるが、任官叙位をはじめ職務上の文書、記録も多く、合せて約400点におよぶ。昭和24年（1949）、当主大炊御門経輝氏（元徳川生物学研究所員・理学博士、徳川義親氏の女婿にあたる）より寄贈。

尾州茶屋家文書 尾張藩持権商人の文書。日記、覚書が中心で、130点余。尾州茶屋家は、徳川家康に仕えて海外貿易などに活躍した茶屋四郎次郎清延（1545～96）の三男が立てた分家。尾張藩に仕えて呉服、雑貨などを商う一方、士分に類する近侍御用を勤め、藩内部の機密の事務や贈答、招待にも当たった。また、新田開発などもさかに行っている。昭和43年、当主の中島建次郎氏より寄贈。

朝岡家文書（小笠原家伝書の内） 故実礼法を家職として代々尾張藩に仕えた尾張藩士朝岡家（文政13年、小笠原姓に改姓）の文書。安永9年（1780）、五代目国輔の時に藩主宗睦の命により江戸の小笠原平兵衛家へ入門、以後代々小笠原流の伝書を書写して持ち帰った。このため約5,000点の資料のほとんどが小笠原流の伝書であるが、勤書や職務上の書状、申渡、御用留など、朝岡家文書と呼ぶにふさわしいものも含まれている。昭和46年、小笠原国暉男氏より寄贈。（なお当文庫では、一括して「小笠原流伝書」と称している。）

堀田家文書 津島の有力家堀田理右衛門家の文書。同家は、津島神社祠官の流れをくむ室町時代以来の旧家。江戸時代以降、酒造と金融を主として富を築くとともに、六世知之（1719～97）を代表として、代々学芸をたしなむ文人を出した。知之の編著およびその手になる写本を中心とした堀田文庫の蔵書1050点とともに昭和53年、堀田克之氏より寄託。6000点を越えると推定される文書のほとんどは現在整理中で公開していないが、金融、新田開発など尾張の有力家の経営を伝える貴重な史料群である。

近年、古文書の解説に興味を示す人々が増加しつつある。古文書には、過去の人々の息づかいを感じさせるノンフィクションの魅力があるようだ。

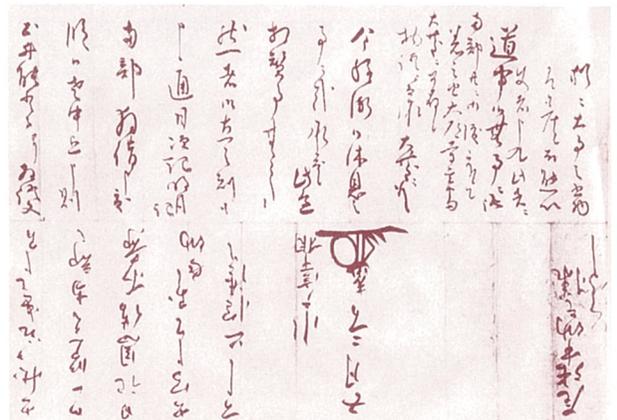


宣旨之記（杜氏通典の内）

「蓬左文庫の古文書」出品目録

〈文庫〉

- | | | | |
|---|--------|---|-------|
| 1. 駿河御讓本請取目録写
(元和・寛永御書籍目録の内)
元和3年正月7日
横田三郎兵衛他 | 2冊 | 25. 新修本草写本贈るにつき書状
(浅井紫山宛)
狩谷椽斎
天保4年 | 1通 |
| 2. 義直藏書預り目録(慶安目録)
慶安4年3月26日
成瀬隼人正他 | 1冊 | 26. 茶道奥秘伝(齊莊宛)
天保11年9月
十一世千宗室 | 1通 |
| 3. 禁中へ御借シ之書籍之目録
寛永元年2月25日
肥田孫三郎他 | 1冊 | 27. 歳暮につき書状(本願寺門跡宛)
江戸初期
尾張相院院 | 1軸 |
| 4. 御書籍弘帳
慶安4年 | 1冊 | 28. 世良田長楽寺文書
江戸時代写 | 1巻 |
| 5. 目次記、明月記借用につき書状
中山備前守宛土井能登守書状
(4月17日)
尾張中納言宛水戸宰相(光圀)書状
(5月3日) | 2通 | 29. 織田信孝家老宽秀吉書状写
(天正10年)10月18日 | 1巻 |
| 6. 吉見文庫藏書につき達書・願書
宝曆7年12月~10年12月
吉見幸和、幸混 | 5通 | 30. 五撰家宛水戸宰相直状案写
寛政4年 | 2通 |
| 7. 吉見家書目録
宝曆7年4月~10年12月
吉見幸和、幸混 | 9冊 | 31. 尾張徳川家簾中側室書状等下書
江戸末期 | 205通 |
| 8. 天学初函貸し出しにつき申渡書
(御小納戸頭取宛、目録・鍵共)
3月 | 2通 | 32. 町中火消出人之定(写)
元禄13年8月 | 1冊 |
| 9. 金瘡一流秘伝抄献本願
7月
枅方棟梁林浅右衛門 | 1通 | 33. 火事之時火消覚帳(写)
貞応2年2月28日 | 1冊 |
| 10. 書物等預書(永田益衛宛)
中村修他
明治5年11月 | 18通 | 34. 系譜(高須松平家系譜)
寛政4年正月
松平撰津守義裕 | 1冊 |
| 11. 壬申11月改御秘書之内より御預之分書抜留
明治5年11月 | 1冊 | 35. 系譜(西城松平家系譜)
寛政4年正月
松平左京大夫 | 1冊 |
| 12. 齊民要術紙背文書(複製)
文永年間 | 9巻 | 36. 熱田神宮修復願につき口上書等写
寛文2年~貞享2年
熱田大宮司 | 7通 |
| 13. 侍中群要紙背文書(複製)
鎌倉時代 | 10巻 | 37. 大坂丸御小屋初五棟御払入札帳
明治5年7月22日、8月17日
知多郡樽水村吉左衛門 | 1冊 |
| 14. 宣旨之記(杜氏通典の内)
左副承旨臣
嘉靖39年9月 | 1巻1冊 | 38. 大坂丸御上段取外シ作料等初払手形式拾壹通
明治4年6月~5年4月
舟大工源七 | 1冊 |
| 15. 宣旨之記(靖節先生集の内)
左副承旨臣朴
万曆11年9月 | 1巻1冊 | 39. 藩士名寄
寛政~明治年間 | 140冊 |
| 16. 古今書札判形之写
慶長年間写 | 4巻4冊 | 40. 諸勤之覚書 書状共
江戸中期
寄田清大夫夫芳 | 1冊13通 |
| 17. 古牋類纂
江戸初期写 | 2冊 | 41. 諸達書付入
寛政10年~文化8年
寄田喜三郎 | 1冊26通 |
| 18. 若王寺証文
慶長年間写 | 1冊 | | |
| 19. 長寛勘文
江戸初期写 | 1冊 | | |
| 20. 朝野群載
三好為康
江戸初期写 | 28巻13冊 | | |
| 21. 東寺文書(和学講談所本)
天保9年写 | 29冊 | | |
| 22. 朝鮮陣中書簡
江戸初期写 | 1冊 | | |
| 23. 参州大樹寺古文書目録
积存永
寛永9年 | 1巻 | | |
| 24. 朝鮮国三使口占聯句並別幅(尾州公宛)
日通信使
天和2年9月 | 2通 | | |



目次記、明月記借用につき水戸光圀書状(尾張光友宛)

42. 八木銀次郎宛書状
江戸末期 20通
43. 尾張藩明治維新関係書状綴
元治元年～明治3年 5綴

<大炊御門家文書>

44. 大炊御門侍従宛領地判物写
貞享2年6月11日
綱吉 1通
45. 大炊御門侍従宛領地判物写
元和3年9月7日
秀忠 1通
46. 任官願いにつき書状(二条殿諸大夫宛)
(慶応3年)3月25日
家信 1通
47. 右近衛権少将任官につき申文ならびに家例
文政11年12月13日
侍従藤原家信 2通
48. 右大臣任官宣旨
寛文3年2月6日
藤原頼業 1通
49. 改元関係書類
文政13年 18通

<朝岡家文書(小笠原家伝書の内)>

50. 御当家之書〔写〕(青山弥次兵衛宛)
朝岡国豊
寛文3年 2冊
51. 秀姫君様御用懸り留帳
朝岡国雄写
寛政11年6月～12月 6冊
52. 朝岡弥十郎宛苗字讓状
小笠原平兵衛
文政13年10月 1通
53. 改姓につき伺書ならびに申渡書
(文政13年)10月
朝岡弥十郎 1通
54. 小笠原弥十郎宛奥義免許皆伝証文
天保10年9月
小笠原常昭 1通
55. 大奥伝濟誓詞之事(小笠原与十郎宛)
安政6年正月17日
羽島衛守 1通

<茶屋家文書>

56. 由緒書(控)
享和3年閏正月
茶屋宗理 1冊
57. 由緒書(控)
天保15年6月
茶屋長与 1冊

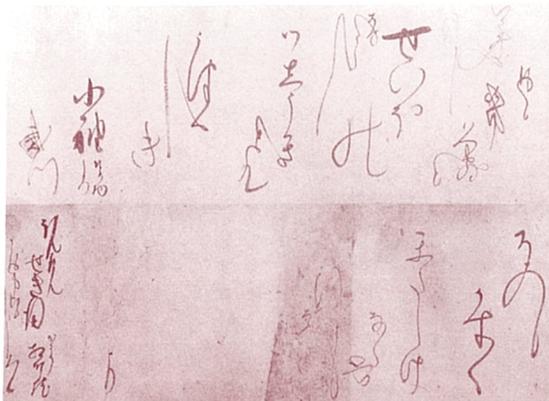
58. 日記
元禄8～16年 1冊
59. 御方々様御登りの節取扱方日記
文化3年 1冊

<堀田家文書>

60. 年貢永代除地証文(堀田理右衛門宛)
齊朝花押
文化12年7月11日 1軸
61. 年貢永代除地証文(堀田理右衛門宛)
慶恕花押
安政3年3月26日 1軸
62. 寺社奉行所御用達申渡書(大黒屋理右衛門宛)
天保11年3月10日 1軸
63. 一代限苗字帯刀指許申渡書
(津島神領百姓理右衛門宛)
天保11年9月3日 1軸
64. 毎年勘定帳
元禄14年2月～文政3年正月
堀田理右衛門泰之・知之 2冊
65. 澄月書状(堀田知之宛)
明和9年～寛政9年 61通

<美濃高木家文書>

66. 高木藤兵衛知行
農州石津郡多良村御繩打水帳
村上孫左衛門
慶長14年9月 4冊
67. 村上孫左衛門様
御檢帳御改之時書出帳
細野村役中
寛永13年9月23日 1冊
68. 御勘定目録(平塚七左衛門宛)
明和6年12月
名及村預り治兵衛 1冊
69. 御勘定(御)目録帳(代官所宛)
弘化3年12月
時下村庄屋利左衛門他 10冊
70. 御奉書並びに御触書留
元禄16年～宝永2年 1冊
71. 御触書
文政10年 1冊
72. 川通御用日記
藤田与次兵衛他
寛政2年～安政6年 8冊
73. 代官拜命につき誓詞(川添本務宛)
富田九郎左衛門安行
天保4年6月 1通
74. 本物返二壳渡申田地之事
(打上村河藤利右衛門宛)
代官池井弥九郎他
安政6年6月 1通



歳暮につき相応院書状(本願寺門跡宛)

5) いわい入 4) 返々 3) 下れ候
まいらせ候 幾 かつく
1) せいほ 久敷 かつしけ
めでたくの と なく
かしく 思
2) 御しうき まいらせ候
として めでたく
うつく かしく
し かしく
小袖しろ物 より
式つ ほんもん おわり
せきさま 相応院
御返事まいらせ候
申候べく候

5. 文庫の構造

前二回にわたって、文庫での仕事について書きましたので、今回は文庫の建物のことなどについて触れておきたいと思います。

第一回で説明した通り、文庫の建物は地上二階、地下一階のレンガ造のモダンな建築で、小じんまりしているのですが、保管の面では厳重な造りになっており、とてもいい建物でした。二重の鍵をあけると、網戸があつてそこにも鍵があり、玄関の鍵をあわせると四重の鍵をかけることになっていました。入口は透かし彫りのある鉄の重いドアで、天井に壁画があり、敷き石の玄関を入ると、左手に義親先生の書かれた「蓬左文庫」の扁額が掛けられていました。このドアは、戦時中に供出してしまったものですから、今とはちがっています。玄関に入って右手に事務室、その隣に閲覧室があり、まん中に大きなテーブルがすえてあつて、せいぜい五～六人が座れる程度でした。書庫は、一号書庫と二号書庫の二つに分かれており、それぞれ内部に階段があつて一・二階に分かれていました。事務室と廊下を隔てて反対にあるのが二号書庫、廊下のつきあたりにあるのが一号書庫でした。内装は共に木造ですが、書棚は、一号書庫が木製、二号書庫がスチール製でした。スチール製の方は、どこの図書館でも普通に使っているものと同じです。棚板は本の厚みに合わせて作られているので、不揃いですが、出し入れはやりやすかったです。駿河御讓本はいわゆる貴重書庫の中に納められていました。

事務室の横の階段を降りると、地下には製本室と機械室のようなものがありました。先回お話しした筆耕の製本なども、皆ここで行いました。ここには、根っからの職人氣質の相当年寄の製本師がいて、糊なども大きなかめの中に何年分も作っておいてありました。大きなまな板のような断ち板があつて、その上で薄刃の庖丁で紙を切り、きちっと製本して、袋綴にしていました。胡蝶装のようなものは、時々はやっていましたが、ふつうはほとんど袋綴でした。

余談になりますが、製本と言えば、東京国立博物館の製本室などに頼んでやったこともありました。重要文化財の「論語集解」は、もともと粘葉装で、江戸期か明治期に袋綴に改装されたのですが、状態があまり良くないものですから、文化庁の方で修繕してくれるという話があつたのです。しかし、名古屋市という富裕都市が持っているのだから名古屋市の方で、ということになってしまい、当時こちらには優秀な職人はいなかったのもそのままになってしまいました。

この製本室から、地下道が伸びていて、生物学研究所や林政史研究所の建物に通じていました。また、事務室からは玄関と反対側に直接外に出る入口があつて、そこから黎明会の事務室に行くことができました。林政史研究所は、細長く南向きで明るい部屋で、所先生がいつも、カードボックスを背にして、窓際の長いテーブルをいっぱいに使って仕事をしておられました。その奥には義親先生のプライベート・ルームがあり、個人的な蔵書も置いておられ、時々泊まったりしていらしたようです。朝出勤すると、開衿シャツに下駄ばき姿で、廊下を電気クリーナーで掃除をしてみえる義親先生に出合ったりしたものです。確か戦後の爵位返上もこの部屋でなされたと思います。

織茂三郎 談（元蓬左文庫調査研究員）

【このシリーズは昭和61年秋の談話を基に編集したものです。】



蓬左文庫」扁額（けやき製、徳川黎明会所蔵）

出版物一覽

名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録(S. 50年刊)	3,500円
名古屋市蓬左文庫国書分類目録(S. 51年刊)	4,000円
名古屋市蓬左文庫古文書古絵図目録(同)	2,500円
尾崎久弥コレクション目録第一〜三集	各 1,500円
名古屋叢書(正編)索引・総目録(S. 53年刊)	2,000円
名古屋叢書続編 索引(S. 47年刊)	700円
名古屋叢書続編総目録(S. 44年刊)	400円
善本解題図録第一〜三集(S. 55年再版)	各 300円
日本の古典<蓬左文庫図録>(S. 52年刊)	200円
蓬左文庫・源氏物語図録(S. 53年刊)	300円
蓬左文庫所蔵古地図複製 No.1〜No.15(S. 55〜61年刊)	各 1,800円
御本印型書鎮(S. 58年製)	1,000円
堀田文庫蔵書目録(S. 58年刊)	500円
蓬左文庫絵葉書<8枚組>(同)	300円
蓬左文庫図録(同)	1,500円
蟹江慶次郎旧蔵書目録(S. 62年刊)	500円
名古屋叢書三編第12巻(S. 56年刊)	3,000円
同 第8巻(S. 57年刊)	3,000円
同 第16巻(同)	3,000円

同 第19巻(S. 57年刊)	3,000円
同 第17巻(S. 58年刊)	3,000円
同 第4巻(S. 59年刊)	3,000円
同 第9巻(S. 60年刊)	3,000円
同 第11巻(同)	3,000円
同 第18巻(1)(同)	3,000円
同 第18巻(2)(同)	3,000円
同 第15巻(S. 61年刊)	3,000円
同 第14巻(同)	3,000円
同 第10巻(同)	3,000円
同 第2巻(S. 62年刊)	3,000円
同 第3巻(同)	3,000円
同 第13巻(同)	3,000円
同 第5巻	
尾張年中行事絵抄上-(S. 63年刊)	3,000円
同 第6巻	
尾張年中行事絵抄中-(S. 62年刊)	3,000円
同 第7巻	
尾張年中行事絵抄下-(S. 63年刊)	3,000円

★以上の出版物は、本文庫事務室において頒布しています。郵送希望の方は郵送料が必要ですので、お問い合わせ下さい。(ただし、古地図複製は郵送不可)

利用ご案内

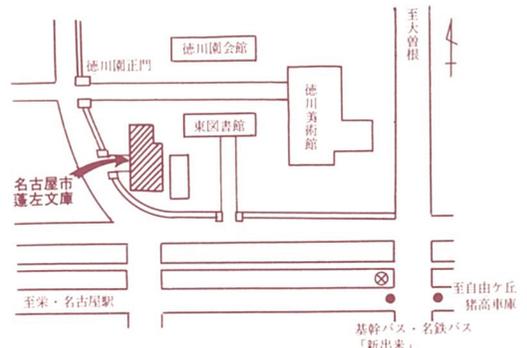
- ▷開館時間 午前9時30分〜午後5時
- ▷休館日 毎月曜日・第3金曜日(館内整理日)
祝日 (日曜に重なる場合は日曜開館、月・火休館)
月曜 " " 月・火休館
年末年始(12月28日〜1月4日)
- ▷閲覧 館内に限り、館外貸し出しはいたしません
(閲覧料)普通図書 無料
重要図書 有料(1部350円)
- ▷展示 随時蔵書の一部を展示
(特別展を除き入場無料)
- ▷複写サービス 普通図書のうち、保存上影響のないものについて複写サービスを行います。その他、マイクロフィルムの利用、写真撮影の申請を受け付けますので、ご来庫の上、ご相談下さい。

名古屋市蓬左文庫

〒461 名古屋市東区徳川町1001番地

☎(052)935-2173

- <名古屋駅から> 市バス「基2」「自由ヶ丘」「猪高車庫」行
名鉄バス「本地ヶ原方面」行
- <栄から> 市バス「基2」「引山」「自由ヶ丘」「猪高車庫」行
「新出来」下車、徒歩4分



「蓬左」第36号 ☆昭和64年1月7日発行 ☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫(東区徳川町1001番地)
☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷：大同印刷株式会社(東区泉2-3-18)